

中国人日本語学習者による 同形類義語の認知処理

小森和子・玉岡賀津雄

キーワード：中国人日本語学習者，同形語，認知処理過程，語彙性判断課題，ブ
ライム効果

1. 研究の背景

日本語の語種の1つである漢語の中には、「緊張」と『紧张』のように、日本語と中国語の両言語で用いられる同形語がある。文化庁(1978)の分類に基づくと、同形語は両言語で意味がほぼ同義(Same)と考えられる同形同義語(以下、S語)、意味の一部が共有されている(Overlapping)同形類義語(以下、O語)、および意味が全く異なる(Different)同形異義語(以下、D語)に大別される。S語は、中国語を第一言語(以下、L1)とする日本語学習者(以下、中国人日本語学習者)にとって、中国語の意味をそのまま日本語のS語に転用できるため、習得が比較的容易である。

しかしながら、O語やD語は、語義、文法的振る舞い、選択制限、使用域等において、日本語と中国語の間で微妙なズレがある。特に、O語は二言語間の意味の対応関係が複雑で、図1に示したように、3つに下位分類される。(1)日本語と中国語で共通する意味(以下、共有義)があるのに加えて、中国語にのみ独自の意味(以下、中国語独自義)があるO語(以下、O語タイプ1)、(2)共有義に加えて、日本語にのみ独自の意味(以下、日本語独

自義)がある〇語(以下, 〇語タイプ2), および(3)共有義に加えて, 日本語と中国語にそれぞれ異なる独自義がある〇語(以下, 〇語タイプ3), である。

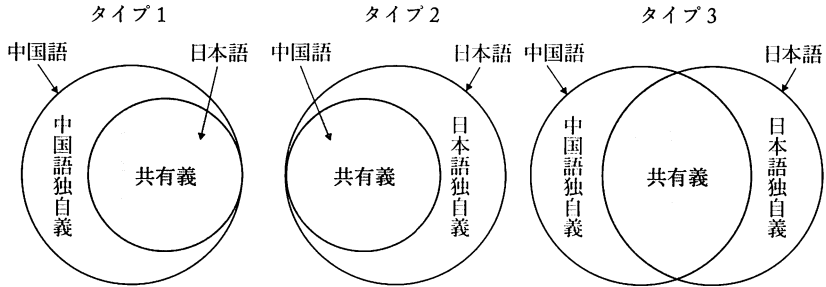


図1 〇語における二言語間の意味の対応関係

例えば、「貧乏」という〇語タイプ1は、日本語でも中国語でも、『贫乏生活』(「貧乏な生活」), 『贫乏时代』(「貧乏な時代」)のように、同じ共起語を取る。ところが、中国語では『经验贫乏』『思想贫乏』という共起関係も成立する。そのため、これを日本語にそのまま置き換えると、過剰転用となり、「*経験が貧乏だ」「*考え方が貧乏だ」という誤用を引き起こすことになる。また、「貴重」という〇語タイプ2には、日本語でも中国語でも『贵重品』(「貴重品」)という言い方がある。しかし、日本語では「時間」や「経験」とも共起し、「貴重な時間」「貴重な経験」と言うが、中国語では『时间』や『经验』は、『贵重』ではなく、『宝贵』と共起し、『宝贵时间』『宝贵经验』と言うのが一般的である。そのため、中国人日本語学習者にとって、「貴重な時間を割いて」などの表現は習得しにくい。

第二言語(以下, L2)としての日本語の習得研究では、加藤(2005)と陳(2003)が、筆記テストによって中国人日本語学習者の同形語の習得について調査している。それによると、同形語の共有義は日本語習熟度の低い学習者でも正答率が高いが、〇語タイプ1は日本語にない中国語の独自義を過剰に転用する誤りが見られる。また、〇語タイプ2については、中国語にない日本語の独自義が習得できていない。ただし、日本語習熟度が高くなるにつれて、中国語の過剰転用や日本語独自義の習得の遅れは徐々に解消されていき、長期的には、日本語としての〇語の意味用法が正しく習得される

ようになる。これらの調査では、学習者が同形語の意味をどの程度正確に習得しているかについて考察している。

それでは、中国人日本語学習者は、こうした意味のズレのある同形語を日本語として見たとき、脳の中にあると仮定される心内辞書(mental lexicon)で、どのように語の意味を活性化しているのでしょうか。日本語習熟度が高くなるにつれて、O語タイプ1やO語タイプ2の語が習得されていくと、これらの語彙の処理のプロセスもまた変化していくのでしょうか。これまで、中国人日本語学習者の同形語の習得については、日中対照研究やL2としての日本語習得研究(例えば、内田1992、大河内1992、加藤2005、陳2003、菱沼1980、文化庁1978、1983、守屋1979、林2002)で扱われることが多かった。しかし、同形語の処理のプロセスを検討した先行研究は、管見の限り、玉岡・宮岡・松下(2002)と小森・玉岡・近藤(2008)の2つしか見当たらない。

玉岡・宮岡・松下(2002)では、中国語を母語とする日本語学習者の超級者を被験者として、①日本語にも中国語にも存在する単語、②日本語にはあるが中国語にはない単語、③中国語にはあるが日本語にはない単語、④日本語にも中国語にも存在しない単語、の4種類の刺激語を用いて、日本語と中国語の両言語で、コンピュータのモニターに呈示された単語が、ターゲットとなっている言語(日本語または中国語)に実在する単語であるか否かを判断する語彙性判断課題を行っている。語彙性判断課題は、単語の呈示から判断までの反応時間を測定して、語彙処理のプロセスを考察する。実験の結果、日本語の語彙性判断課題では、日本語にも中国語にも存在する単語の方が、日本語にはあるが中国語にはない単語より語彙性判断が迅速かつ正確であった。これは、L2の日本語の処理にL1の中国語の知識が促進的な効果を及ぼしたことを示す。しかし、中国語の語彙性判断課題では、中国語にも日本語にも存在する単語と、中国語にはあるが日本語にはない単語の間には有意な処理速度の差が見られなかった。このことは、L1の中国語の処理にL2の日本語の知識が影響しなかったことを示している。以上の結果は、L2の語彙処理においては、L1の単語の知識が促進的に影響するが、L1の語彙処理には、L2の単語の知識が影響しないという二言語間の非対称性を示唆するものである。

さらに、小森・玉岡・近藤(2008)では、日本語と中国語とで意味のズレ

がある O 語タイプ 1², 日本語と中国語とで意味が全く異なる D 語(同形異義語)について, L2 の日本語の処理過程で L1 の中国語の知識がどのように影響するかを, 日本語習熟度の違いで考察した。実験の課題としては, O 語タイプ 1 や D 語を中国語独自義で解釈をすると意味が通る日本語の非文(例えば, 「*コンピューターに文字を輸入する」)をコンピュータに呈示して, 一文が意味的・文法的に日本語として成立するか否かを判断する文正誤判断課題を行った。これらの文は日本語では正しくないので否定されなければならない。非単語を入れた非文(「*コンピューターに文字を輸入する」)の統制条件(これも否定されるべき文)と比べると, 日本語習熟度の高・低グループともに, O 語タイプ 1 や D 語の入った文の否定には長い時間を要し, 誤答率も高かった。日本語習熟度の高・低グループの違いは, 誤答率に顕著に見られ, O 語タイプ 1 では日本語習熟度の低いグループが 43.60% から日本語習熟度の高いグループが 29.60%, D 語では日本語習熟度の低いグループが 36.80% から日本語習熟度の高いグループが 18.00%, と誤答が少なくなっている。この実験結果は, L2 である日本語の処理に, L1 である中国語の知識が強く干渉し, 抑制的に影響したことを示している。さらに重要なのは, 日本語習熟度が高くなっても, 干渉の程度は小さくなるものの, 中国語からの干渉が消えない点である。つまり, O 語タイプ 1 や D 語のように, 中国語にのみ独自の意味があり, その意味を日本語に転用できない同形語を処理する場合でも, L2 の処理過程で L1 の中国語の単語の意味が干渉することを示している。

以上の二つの研究では, 日中同形語の L2 での処理においても, L1 の意味の知識が影響することを示している。しかしながら, これら両研究において検証されていない課題が残っている。

玉岡・宮岡・松下(2002)の研究では, 日本語にも中国語にも存在する単語はすべて S 語であり, 二言語間で意味が一致するものだけである。玉岡・宮岡・松下(2002)で示された語彙処理過程における非対称性(すなわち, L2 の処理には L1 が影響するが, L1 の処理には L2 は影響しない)という指摘は, あくまで二言語間で意味が同じ語を処理する過程のみに限定され, 二言語間で意味がズレている O 語のような語彙処理の過程については明らかではない。さらに, 玉岡・宮岡・松下(2002)では, 日本語習熟度が超級レベルの学習者のみを対象としているため, 日本語習熟度による処理の違いにつ

いては検討していない。

一方、小森・玉岡・近藤(2008)の刺激語には、二言語間で意味のズレのある O 語が含まれてはいるが、実験で明らかになったのは、L2 として処理する過程で L1 の中国語独自義が抑制的な影響を及ぼすという点であり、共有義が活性化される過程で L1 が作用するのか否かについては検討されていない。共有義部分の活性化を検討しなければ、O 語のような意味のズレのある同形語を L2 として処理する過程で、L1 の知識が影響すると結論付けることはできない。また、小森・玉岡・近藤(2008)では、L2 の日本語での実験は行われているが、L1 の中国語で実験が行われていないため、玉岡・宮岡・松下(2002)で示されたような、L1 の処理過程において L2 が作用しないという結果が、O 語の処理過程にも該当するのかどうか検証する必要がある。

そこで、本研究では、先行研究が残した以上の課題に取り組み、L2 習得研究の観点から中国人日本語学習者の日本語としての O 語の処理過程について考察を行う。

2. 研究の目的

本研究の目的は 2 つある。1 つは、中国人日本語学習者が O 語を処理する過程で、L1 の中国語と L2 の日本語の両言語の単語の知識が共有義と独自義の活性化にどう影響するかを解明することである。もう 1 つは、日本語習熟度が異なると、O 語の語彙処理のメカニズムが変化するかを検討することである。そのために、本研究では語彙性判断課題による意味のプライミングの手法を使った実験を行う。プライミングとは、ある語を先行呈示した後に、ターゲットとなる語を続けて呈示して、先行呈示された語の違いによるターゲットの語の処理時間と誤答率を比べる手法である(詳細は次章を参照)。

2.1. 中国語および日本語での O 語の処理の違い

第 1 の研究の目的は、中国人日本語学習者が、O 語を L1 の中国語として処理する場合に、L2 の日本語が、両言語の共有義と中国語独自義の活性化に対してどう影響するか、また逆に、O 語を L2 の日本語として処理する場

合、L1の中国語が、共有義と日本語独自義の活性化にどう影響するかを考察することである。これについては、両言語間の影響関係によって2つの対立する結果が予測される。

1つは、一方の言語の処理過程に他方の言語の知識が影響する場合である。この場合、共有義は両言語からの活性化の影響を受けて、独自義よりも迅速に処理される。結果として、O語を日本語として処理する過程では、中国語の影響を受け、共有義の方が日本語独自義よりも迅速になる(反応時間が短く)、また誤答も少なくなるという予測である。同様に、O語を中国語として処理する過程では、日本語の影響を受け、共有義の方が中国語独自義よりも迅速かつ正確に処理されると予想される。

しかし、一方の言語の処理過程で他方の言語が影響を及ぼさないと仮定すれば、対立する予想が成り立つ。つまり、O語を日本語として処理する過程において、中国語の影響を受けないため、共有義と日本語独自義の処理の効率性(処理速度と正確さ)に違いはないという予想である。これはO語を中国語として処理する過程でも同じことになり、日本語の影響を受けないため、共有義と中国語独自義に違いがないと予想される。

2.2. 日本語習熟度のO語の処理への影響

第2の目的は、日本語習熟度が高い学習者と低い学習者として、L1の中国語の処理過程でL2の日本語が及ぼす影響と、その逆のL2の日本語の処理過程でL1の中国語が及ぼす影響に違いがあるかどうかを解明することである。これについても、2つの対立する予想が立てられる。

まず、一方の言語処理の過程で他方の言語が影響するとすれば、中国語の処理過程では、日本語習熟度の高い学習者は、日本語からの促進的な影響を強く受けるため、共有義の方が中国語独自義より反応時間が短く、誤答率が低くなると予想される。一方、日本語習熟度の低い学習者については、日本語の知識が不十分なために促進的な影響を受けず、共有義と中国語独自義とで反応時間および誤答率に差がないと予想される。しかし、日本語の処理過程では、日本語習熟度の高い学習者は日本語独自義の習得が進んでくるため、その活性化が迅速になり、共有義でも日本語独自義でも、反応時間が短く、誤答率も低くなると予想される。一方、日本語習熟度の低い学習者は、日本語独自義の活性化が迅速でないため、共有義に比べて、日本語独自義の

反応時間は遅く、誤答率は高いと予想される。

しかし、一方の言語処理の過程で他方の言語が促進的な影響を及ぼさないとすれば、予想が異なってくる。中国語の処理においては、日本語からの影響が無くなるので、日本語習熟度の高低による違いはないと予想される。同様に、日本語の処理においても、中国語の影響が無いのであれば、日本語習熟度の違いが〇語の処理の差に影響しなくなると予想される。もちろん、日本語の語彙処理全般については、日本語習熟度の高い学習者の方が低い学習者よりも迅速かつ正確に処理するであろう。

3. 実験

3.1. 実験1(中国語での〇語の処理実験)

3.1.1. 方法

実験1では、中国人日本語学習者に、L1である中国語の語彙性判断課題を意味的プライミング条件で行う。語彙性判断課題は、コンピュータに呈示された文字列が実在語であるか否かを判断する課題であるが、この課題だけでは当該語のどのような意味が活性化しているかを推測することが難しいため、本研究では意味的プライミングの条件を加える。

語彙性判断課題による意味的プライミング実験では、ある語(“医者”)に対して語彙性判断課題を行うとき、その語と意味的に関連のある語(“患者”)を先行して呈示したときの方が(“患者” → “医者”), 関連のあまりない語(“掃除”)を先行呈示したときより(“掃除” → “医者”), 基準となる統制条件(“++” → “医者,”)に対して、判断が迅速になるという効果(プライム効果)を利用する。プライム効果が認められるのは、“医者”という語を呈示する前に、意味的に関連のある“患者”を先行呈示することによって、“医者”の意味の活性化が促進され、結果として“医者”という語に対する判断も迅速になるからである。実験では、意味的に関連のある語を先行呈示した場合の反応時間が、統制条件の反応時間に対して有意に短い場合に、プライム効果があると判定する。なお、実験の対象になっている語(“医者”)のことを「ターゲット語」、先行して呈示する語(“患者”や“掃除”)のことを「プライム語」と呼ぶ。

実験1のターゲット語は〇語タイプ1である。観察の対象は〇語タイプ

1 の中の、共有義と中国語独自義の意味の活性化である。よって、共有義としての○語タイプ1のプライム効果と、中国語独自義としての○語タイプ1のプライム効果を比較することになる。つまり、共有義を活性化させる場合と、中国語独自義を活性化させる場合とで、○語タイプ1に対する反応時間を比較し、どちらの意味がより迅速に活性化しているかを検討するということである。例えば、『紧张』という○語タイプ1には、〈張り詰めて緩みがないこと〉という共有義と、〈不足している〉という中国語独自義がある。共有義の活性化を促進する条件では、『缓和』をプライム語として呈示する。中国語独自義の活性化を促進する条件では、『资金』をプライム語として呈示する。そして、『缓和』→『紧张』という共有義条件の反応時間と、『资金』→『紧张』という中国語独自義条件の反応時間が、統制条件の反応時間に比べて短く、プライム効果が認められるかどうかを検討する。

3.1.2. 被験者

中国大陸出身の中国人日本語学習者(学部生、大学院生)、64名が実験に参加した。女性は41名(平均年齢23歳8ヶ月)、男性は23名(平均年齢27歳4ヶ月)である。被験者は全員日本語能力試験2級レベル以上の日本語習熟度を有する者であったが、統一した指標で日本語習熟度を弁別する目的で、クローズテストを課した。

クローズテストは、原文から語や文字を抜くという比較的簡便な方法で作成されるが、言語能力を総合的に測定できるテスト形式の1つであると言われている。言語能力を総合的に測るテストであると考えられる理由は、第1に、クローズテストが空所補充という解答方式であることに起因する。空所補充は、意味的、統語的に()に入るべき語が規定される場合や、前後の語との共起関係から()の語が特定される場合がある。また、前後の文との関係や、文章全体の内容理解によって、()の語が絞られることもある。さらには、文章のトピックに関する知識、世界知識等が手掛かりとなる場合もあり、様々な知識や能力を幅広く測定できると言われている(Jonz 1990, Read 2000, Nation 2001)。第2に、クローズテストが言語能力を測定する大規模テストや個別技能テストと相関が高く、基準関連妥当性や信頼性が高いことを示唆した実証研究が多数あることが挙げられる。例えば、Oller(1973)では、英語をL2として学ぶ学習者に、英語のクローズテストと

UCLA の英語のプレースメントテストを行い、両者の得点の相関が高いことから、クローズテストが英語能力を総合的に測定するのに妥当なテストであると述べている。また、Oller and Nagato(1974)では、日本人英語学習者の英語のクローズテストの得点と TOEFL の各セクションの得点に強い正の相関があることから、クローズテストが日本人英語学習者の英語力を総合的に測定する指標として有効であると報告している。L2 としての日本語でも、類似した研究結果が報告されている。秦(1983, 1987)は、複数のクローズテストが学期末テスト(聴解, 文法, 語彙, 読解, 作文, 会話)やプレースメントテスト(聴解, 漢字, 文法)と相関していることから、基準関連妥当性の高いテストであると述べている。また、小川(1992)、Douglas(1994)の研究でも、日本語学習者に対して行ったプレースメントテスト、中間テスト、漢字仮名交じりのディクテーションテスト等とクローズテストとの間に高い相関が得られている。これらの研究から、クローズテストは総合的な言語能力を測る指標の一つとして有効であると考えられるため、本研究でも被験者の日本語習熟度を弁別する指標として用いることにした。

クローズテストの作成基準は Oller(1971)の知見に依拠した。Oller(1971)では、クローズテストの原文には被験者の言語習熟度よりやや易しい文章を選び、5 語(文字)から 10 語(文字)間隔に 1 つ抜くという割合で削除するのが適当であるとしている。また、削除する文字や語の数は、テストの信頼性という点から見て、50 以上必要であると述べている。そこで、本研究では、第二言語としての日本語の読解教材の 1 つである『中級からの日本語 読解中心』に収録されている、増田光吉(1964)『アメリカの家族・日本の家族』の一部抜粋(総文字数 585 文字)を原文として選んだ。形態素解析の結果、延べ語数は 308 語であった。308 語の日本語能力試験出題基準の級の内訳は表 1 の通りである。表 1 を見ると、3 級までの語で文章全体の約 80%、2 級までの語で約 94%を占めており、本研究の被験者には適当な難易度であると言える。

表1 クローズテストの原文を構成する語の出題基準級

出題級	延べ語数
級外	12(3.9%)
1級	11(3.6%)
2級	43(14.0%)
3級	47(15.3%)
4級	195(63.3%)
合計	308(100.0%)

この原文から6文字毎に1文字を削除し、全部で86文字を削除した。ただし、当該箇所が句読点や記号等の場合、同じ単語の一部が頻繁に削除される場合等は、当該箇所の前後の何れかの文字を削除するようにした(クローズテストはAppendix 1を参照)。なお、日本語のクローズテストで削除する単位は、語の場合と文字の場合があり、秦(1983, 1987), Koda(1989), Douglas(1994)では、形態素を語と定義して、語単位で削除する方法を採用し、小川(1992), Yamashita(1994), 鶴見(2005)では、文字単位で削除する方法を採用している。日本語のように分かち書きのない言語の場合、語の切れ目を認識する能力も重要であることや、被験者に一語の定義を説明するのが困難であること等を考慮し、本研究では文字単位で削除する方式を採用した。その結果、削除した86文字は、表2に示したように、助詞、接辞、動詞や名詞等の語の一部、慣用表現の一部、接続詞の一部等であり、様々な知識をバランスよく問うようになっている。

表2 クローズテストの原文から削除された文字

品詞	頻度
動詞の一部	28(32.56%)
名詞の一部	23(26.74%)
助詞	9(10.47%)
形容詞・形容動詞の一部	8(9.30%)
副詞の一部	7(8.14%)
慣用表現の一部	3(3.49%)
指示詞の一部	3(3.49%)
助動詞の一部	2(2.33%)
接尾辞	2(2.33%)
接続詞の一部	1(1.16%)
合計	86(100.0%)

このようにして作成したクローズテストは1文字1点の86点満点で採点した。採点の結果、平均は58.09、標準偏差は11.96であった。また、テストの内部一貫性に関する信頼性をクロンバックの信頼度係数で検討した。その結果、 $\alpha = .946$ と極めて高い値が得られた。

次に、64名の被験者から日本語習熟度の上位群と下位群とを選定した。上位群は64名の被験者全体の平均である58.09点からプラス約9点以上(すなわち、67点以上)取得した群とし、22名(最高得点82点)がこれに該当した。また、下位群は全体の平均からマイナス8点以下(すなわち、50点以下)の群とし、22名(最低得点34点)を選んだ。両群の平均および標準偏差は表3に示した通りである。

表3 日本語習熟度の上位群と下位群のグループ分け

日本語習熟度	平均点	標準偏差	最低点	最高点	n
上位群	71.45	3.88	67	82	22
下位群	44.68	4.31	34	50	22
全体	58.09	11.96	34	82	64

3.1.3. 刺激語

刺激語は語彙性判断課題の対象となるターゲット語と、ターゲット語に先行して呈示するプライム語である。まず、ターゲット語は共有義と中国語独自義の両方を含むO語タイプ1である。ターゲット語の選定は、同形語の先行研究(上野・魯1995, 加藤2005, 金1987, 1990, 陳2002, 2003, 飛田・呂1994, 文化庁1978, 1983, 守屋1979)を参照しながら、中国語母語話者の協力を得て、以下の21語を選定した。なお、選定したO語タイプ1の共有義と中国語独自義はAppendix2の通りである。

『暧昧』『意見』『紧张』『失败』『释放』『对象』『多少』
 『出口』『东西』『热心』『输入』『大意』『检查』『困难』
 『品质』『处理』『广大』『生气』『所有』『严重』『培养』

次に、プライム語の選定を行った。プライム語はターゲット語と意味的に関連のある語である。ターゲット語に共有義と中国語独自義の2つの意味があり、本研究ではこの2つの意味の活性化の相違を検討するので、プラ

イム語も共有義と意味的に関係があるプライム語(以下、共有義プライム語)と、中国語独自義と意味的に関係があるプライム語(以下、中国語独自義プライム語)を、それぞれ1つずつを選んだ。例えば、『紧张』というターゲット語の場合、共有義〈張り詰めて緩みがないこと〉については、反義語の『缓和』を選定し、これを共有義プライム語とした。中国語独自義〈不足している〉については、共起語である『资金』を選定し、中国語独自義プライム語とした。なお、共有義プライム語も中国語独自義プライム語も、日本語と中国語とで意味のズレがない同形同義語から選んだ。

このような方法で、全てのターゲット語それぞれについて、共有義プライム語と中国語独自義プライム語を各1語ずつ選定したが、選定にあたっては、いずれかのプライム語が使用頻度が極端に高かったり、親近性が高かったりすると、それだけで活性化が迅速になってしまい、実験結果を正しく考察することができなくなるので、意味要因(ここでは、共有義と中国語独自義)以外の特性が実験に影響しないよう、共有義プライム語と中国語独自義プライム語の6つの語彙特性を統制した。

(1)のターゲット語との関係強度の指標は、「非常に強い関係がある」の5ポイントから、「全く関係がない」の1ポイントまでの5段階評定値を用いることとした。本評定値は、中国語を母語とする28名(20～28歳、平均22歳1ヶ月、標準偏差2.04)の大学生、大学院生を対象に行った質問紙による予備調査の結果に基づく。

(2)の中国語としての単語使用頻度は『現代汉语频率词典』のデータを利用した。『現代汉语频率词典』は、新聞、雑誌、小中高の教科書、文学作品、会話データ等をコーパスとして形態素解析して得た延べ語数約131万語(異なり語数約31,000語)に占める出現回数の百分率である。なお、日本語の使用頻度は出現回数であり、中国語は出現率であるため、値の単位は異なるが、本研究ではそれぞれの値をそのまま用いた。

(3)の日本語としての単語使用頻度は、『NTTデータベースシリーズ—日本語の語彙特性』の指標を採用した。実験1は中国語実験であるが、日本語の単語使用頻度が中国語の判断に影響を及ぼす可能性が否定できないため、日本語の頻度も統制することとした。なお、本データベースの単語使用頻度は、1985年から1998年までの14年間に刊行された朝日新聞の朝夕刊(東京版)の約91万6千の記事を形態素解析して得た延べ形態素数、約2億

9千万における約30万語の異なり形態素数の出現回数である。

(4)の日本語としての親近性も『NTT データベースシリーズ—日本語の語彙特性』の中から、単語親密度(文字呈示の場合)の値を用いて、統制した。単語親密度は、単語に対する個人の主観的評定値であり、同データベースでは、20代前半を中心とした35名の被験者が評定した結果に基づく値である。『新明解国語辞典(第4版)』の見出し語約7万語を、文字呈示、音声呈示、文字および音声呈示の3パターンで呈示し、それぞれの方法で呈示された単語に対して、35名の被験者が親密度を7段階で(「1:なじみがないから」から「7:なじみがある」まで)評定した値である。なお、中国語における親近性に関する統制も試みたが、相当するデータベースが見当たらなかったため、統制していない。

(5)の漢字の画数は、『現代汉语词典』に記載されている簡体字の画数を指標とした。なお、本実験の刺激は漢字二字熟語であるため、単漢字の画数を合計した値を用いる。

(6)の単語の難易度は、国際交流基金・日本国際教育協会(2002)『日本語能力試験出題基準(改訂版)』を指標とした。『日本語能力試験出題基準(改訂版)』では、約8,000語の単語を、4級(初級前半終了レベル)から1級(上級レベル)までの4段階のレベルに分類し、提示している。そこで、各プライム語候補の該当する級を難易度の指標とし、難易度の低い4ポイントから難易度の高い1ポイントを割り当てた。ただし、『日本語能力試験出題基準(改訂版)』に収録されていない級外語彙には0ポイントを充てた。

以上の6つの語彙特性が、共有義プライム語と中国語独自義プライム語の間で均質になるように統制しながら、プライム語の選定を行った(プライム語の一覧はAppendix 3を参照)。共有義プライム語と中国語独自義プライム語のこれら6つの語彙特性の平均と標準偏差は、表4に示した通りである。独立したサンプルの t 検定の結果、6つの語彙特性すべてに関して、共有義プライム語(21語)と中国語独自義プライム語(21語)との間に有意な差はなかった。

表4 共有義プライム語と中国語独自義プライム語の語彙特性比較

語彙特性	共有義プライム語		中国語独自義 プライム語		<i>t</i> 検定の結果
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
(1) 意味的関連性	3.75	0.40	3.75	0.38	<i>t</i> (40)=0.073, <i>n.s.</i>
(2) 語彙使用頻度(中国語)	0.01	0.01	0.02	0.05	<i>t</i> (40)=-1.404, <i>n.s.</i>
(3) 語彙使用頻度(日本語)	17,329	25,511	30,227	69,886	<i>t</i> (40)=-0.795, <i>n.s.</i>
(4) 親近性(日本語)	5.89	0.43	6.08	0.41	<i>t</i> (40)=-1.467, <i>n.s.</i>
(5) 漢字画数(中国語)	15.05	4.61	15.05	5.16	<i>t</i> (40)=0.000, <i>n.s.</i>
(6) 難易度(日能験出題級)	1.67	1.02	1.71	1.42	<i>t</i> (40)=-0.125, <i>n.s.</i>

以上のようにして、ターゲット語 21 語とプライム語 42 語(共有義プライム語 21 語、および中国語独自義プライム語 21 語)を選定した。基準となる統制条件のプライム刺激としては、無意味記号の“++”を用いた。従って、共有義プライム語とターゲット語のペアが 21 対、中国語独自義プライム語とターゲット語のペアが 21 対、“++”刺激とターゲット語のペアが 21 対の、合計 63 対を作成した。これらの 3 種類の刺激対から、ターゲット語が重ならないようにして 7 対ずつの合計 21 対を 3 種類作成し、カウンターバランスを取って、被験者に割り当てた。この 21 対は正しい肯定反応である。

また、分析の対象としないダミー刺激として、正しい否定反応の刺激を 21 対作成した。ダミー刺激対には、S 語のプライム語 21 語と非単語のターゲット語 21 語のペアを使用した。非単語は、完全な無意味語 11 語と、日本語には存在するが中国語には存在しない漢語 10 語の、計 21 語である。なお、ダミーの正しい否定反応は研究対象外であるため、1 種類のみ作成し、全被験者共通とした。よって、被験者一人当たり、正しい肯定反应用の 21 対と正しい否定反应用的の 21 対からなる合計 42 対を試行した。

3.1.4. 手続き

実験は、音声を遮断した実験室で個別に行った。実験に用いた装置は 14.1 インチのコンピュータのディスプレイ (SONY 製、VAIO PCG-Z1V/P 型) で、縦 1.0cm × 横 1.8cm 程度の大きさで刺激を呈示した。刺激の呈示と反応時間の計測には、Jonathan Forster の開発した DMDX Display Software (<http://www.u.arizona.edu/~kforster/dmdx/dmdx.htm>) を用いた。なお、実験

1 は、被験者が中国語のレキシコンにアクセスする過程で、日本語の知識が影響を及ぼすか否かを検討する中国語実験であるため、ターゲット語もプライム語も中国語の書字である簡体字で呈示する。日本語の字体で呈示すると、被験者に日本語としての処理を促すことになり、実験の目的が達成されないからである。

はじめに、画面中央に凝視点を 600 ミリ秒呈示し、その直後に同じ位置にプライム語を 280 ミリ秒呈示し、120 ミリ秒の間隔をおいて、ターゲット語を呈示した。ターゲット語は被験者の判断直後に自動消去されたが、6,000 ミリ秒を越える場合には無反応として処理するようプログラムした。また、判断の直後に、被験者の判断が正しかったか否かのフィードバックを、画面に呈示するようにプログラムした。各試行における判断の正誤を示すことにより、被験者の動機付けが高まり、最後まで集中力を維持して課題に取り組めると考えたからである。そして、ターゲット語が消去されてから、600 ミリ秒の間隔をおいて、次試行の凝視点が呈示された。一連の流れは、図 2 に示した通りである。

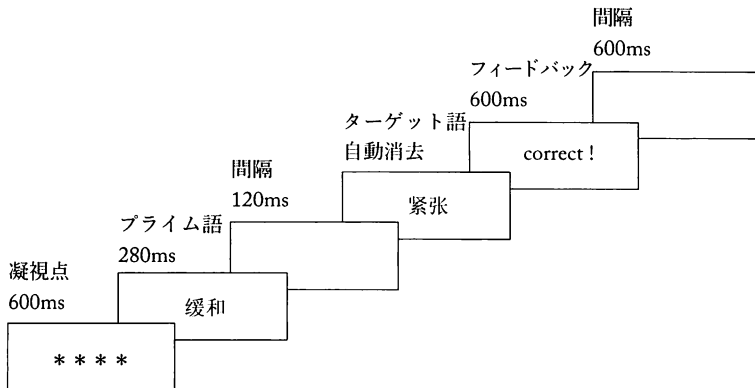


図 2 実験の流れ

プライム語の呈示からターゲット語の呈示までの時間は SOA (Stimulus Onset Asynchrony) と呼ばれるが、本研究の場合、280 ミリ秒(プライム語呈示時間) + 120 ミリ秒(ターゲット語呈示までの刺激間隔)の 400 ミリ秒が SOA である。SOA は 500 ミリ秒を超えると意識的な処理が介入すると言われている (Posner and Snyder, 1975) ため、本研究のように自動的 (automatic)

な語彙の意味的な拡散的活性化(semantic spreading activation)を想定した実験では、500 ミリ秒を超えないことが重要である。英語母語話者を対象にした実験では、プライム語を短い設定で60 ミリ秒、長い設定で500 ミリ秒呈示して比較した意味的プライミングの実験があるが(Forster, Davis, Shoknecht and Carter 1987, Forster and Taft 1994)、漢字はアルファベットよりも視覚的に複雑であるため、プライム語の呈示時間は少し長めに設定されることが多い。例えば、中国語母語話者に対して、漢字1字をプライム語とした実験(Perfetti and Zhang, 1995 の実験2)では、呈示時間を短いもので90 ミリ秒、中間として140 ミリ秒、長いもので260 ミリ秒としているが、意味的なプライム効果は140 ミリ秒で観察されている。また、日本語母語話者に対する漢字二字熟語のプライミング実験では、SOAが85 ミリ秒を短い基準、150 ミリ秒を長めの基準として実験している(Chen, Yamauchi, Tamaoka and Vaid, 2007)。本研究では、被験者が日本語をL2とする日本語学習者であるが、中国語が母語で漢字に馴染みのあることを考慮し、次のように考えて、SOAを設定した。まず、Perfetti and Zhang(1995)が中国語母語話者に対して中国語の漢字1字のプライム呈示時間を140 ミリ秒としているので、本研究では漢字2文字であるため、ちょうどその2倍の280 ミリ秒をプライム呈示時間とした。しかし、直後にターゲット語を呈示する(すなわち、SOAは280 ミリ秒)のではなく、日本語の意味的な拡散的活性化が十分に起こるように、ターゲット語までの刺激間間隔を120 ミリ秒設けて、SOAを400 ミリ秒とした。なお、被験者と同じ母集団に属する中国人学習者を対象に予備実験を行い、このSOAで意味的活性化が起こることを確認した。

プライム語とターゲット語は、混同を避けるために、プライム語を青色で、ターゲット語を黒色で示した。被験者には、黒色で記されたターゲット語に対して語彙判断するように教示した。語彙判断は、日本語に実在する単語であれば、キーボードの右シフトキーの位置にある‘Yes’を、日本語に実在しない単語であれば、左シフトキーの位置にある‘No’を、できるだけ正確に、かつ、できるだけ速く押すよう、教示した。なお、被験者は全員右利きであった。また、被験者がプライム語を無視することのないように、青色で呈示された単語は意味を想起するよう指示した。なお、実験に先立って、20対の刺激例で練習試行を行った。

3.1.5. 結果

反応時間については、正しく判断された刺激項目のみを分析に使用した。全被験者(64名)の条件ごとの反応時間と誤答率の平均、標準偏差、およびプライム効果(統制条件から共有義条件を引いた値、または、統制条件から中国語独自義条件を引いた値)は表5に示した通りである。

表5 実験1(中国語実験)の語彙性判断課題におけるプライム効果

プライム条件	反応時間(ms)		プライム効果(ms)	誤答率(%)		プライム効果(%)
	平均	標準偏差		平均	標準偏差	
共有義条件	805	197	△118	1.34	4.91	△1.34
中国語独自義条件	815	227	△108	1.76	5.40	△0.92
統制条件	923	243		2.68	5.62	

注. $n=64$.

反応時間について、意義要因(共有義条件、中国語独自義条件、および統制条件の3種類のプライム条件)の反復測定による一元配置の分散分析を行った。分析は、条件を各被験者の平均で比較する被験者分析(F_1)と、条件を各刺激項目(すなわち、ターゲット語)の平均で比較する項目分析(F_2)の両方で行った。その結果、意義要因の主効果が有意であった [$F_1(2, 126) = 21.301, p < .001; F_2(2, 124) = 19.117, p < .001$]。そこで、3種類のプライム条件について条件間の単純対比をおこなった。その結果、共有義条件も [$F_1(1, 63) = 28.548, p < .001; F_2(1, 62) = 30.480, p < .001$]、中国語独自義条件も [$F_1(1, 63) = 28.259, p < .001; F_2(1, 62) = 22.781, p < .001$]、ともに統制条件(プライム効果の基準)との差が有意であった。すなわち、共有義条件でも、中国語独自義条件でも、先行呈示したプライム語がターゲット語の認知処理を促進するというプライム効果が認められた。しかし、共有義条件と中国語独自義条件の差は有意ではなく [$F_1(1, 63) = 0.322, n. s.; F_2(1, 62) = 0.654, n. s.$]、両条件におけるプライム効果の大きさに違いはなかった。

また、誤答率についても、同様に分析を行った。その結果、意義要因の主効果は有意でなかった [$F_1(2, 126) = 1.222, n. s.; F_2(2, 124) = 1.107, n. s.$]。すなわち、誤答率においては、プライム効果は認められなかった。これは、ターゲット語がL1であったため、一般的に処理が正確だったことに起因すると考えられる。

次に、L1の処理過程でL2日本語の知識が促進的な影響を及ぼしたか否かを検討するために、日本語習熟度による分析を行った。日本語習熟度は、「3.1.2. 被験者」で述べたように、クローズテストで弁別した上位群と下位群の各22名、計44名で分析した。各条件の反応時間と誤答率の平均、標準偏差、およびプライム効果は、表6に示した通りである。分析は、意義要因(共有義条件、中国語独自義条件、および統制条件)と日本語習熟度要因(上位群、下位群)の3×2の二元配置の分散分析で、意義要因は反復測定 of 被験者内要因、日本語習熟度要因は被験者間要因である。分析の結果、意義要因の主効果が有意であった [$F_1(2, 84) = 13.432, p < .001$; $F_2(2, 80) = 13.729, p < .001$]。しかし、日本語習熟度要因の主効果は有意でなかった [$F_1(1, 42) = 1.550, n. s.$; $F_2(1, 40) = 0.276, n. s.$]。両変数の交互作用も有意でなかった [$F_1(2, 84) = 1.406, n. s.$; $F_2(2, 80) = 1.420, n. s.$]。反復測定である意義要因の主効果が有意だったので、3種類のプライム条件について条件間の単純対比を行った。その結果、共有義条件 [$F_1(1, 42) = 15.864, p < .001$; $F_2(1, 40) = 20.130, p < .001$] も、中国語独自義条件 [$F_1(1, 42) = 18.076, p < .001$; $F_2(1, 40) = 14.726, p < .001$] も、統制条件との差が有意であった。しかし、共有義条件と中国語独自義条件の差は有意ではなかった [$F_1(1, 42) = 0.175, n. s.$; $F_2(1, 40) = 0.452, n. s.$]。このことから、プライム効果については、日本語の知識や日本語習熟度の影響を受けないことがわかった。

表6 中国語実験の語彙性判断におけるプライム効果(習熟度別)

日本語上位群						
プライム条件	反応時間 (ms)		プライム効果 (ms)	誤答率 (%)		プライム効果 (%)
	平均	標準偏差		平均	標準偏差	
共有義条件	836	252	△ 133	2.60	7.16	△ 0.65
中国語独自義条件	885	282	△ 84	3.25	7.55	△ 0.00
統制条件	969	320		3.25	6.13	

注. $n = 22$

日本語下位群						
プライム条件	反応時間 (ms)		プライム効果 (ms)	誤答率 (%)		プライム効果 (%)
	平均	標準偏差		平均	標準偏差	
共有義条件	793	162	△ 94	0.65	3.05	△ 1.95
中国語独自義条件	760	173	△ 127	1.30	4.20	△ 1.30
統制条件	887	210		2.60	5.64	

注. $n = 22$

また、誤答率についても同様の分析を行ったところ、意義要因も [$F_1(2, 84) = 0.555, n. s.$; $F_2(2, 80) = 0.483, n. s.$], 日本語習熟度要因も [$F_1(1, 42) = 2.139, n. s.$; $F_2(1, 40) = 0.711, n. s.$], とともに主効果は有意ではなかった。両変数の交互作用も有意ではなかった [$F_1(2, 84) = 0.185, n. s.$; $F_2(2, 80) = 0.725, n. s.$]。これは、表 6 からわかるように、全体的に誤答率が低く、中国語の同形語の認知が日本語習熟度に関わらず、正確に行われていることを示している。

3.1.6. 考察

以上の結果から、中国人日本語学習者については、中国語独自義に関連したプライム語を先行呈示した場合でも、共有義に関連したプライム語を先行呈示した場合でも、ターゲット語である同形語の中国語としての語彙性判断課題の遂行において、プライム効果が認められ、それらの促進効果は両条件で同程度であることがわかった。また、日本語習熟度の上位群および下位群ともに、共有義条件と中国語独自義条件において、同程度のプライム効果が認められた。このことは、中国人日本語学習者の同形語の中国語処理においては、L2 の日本語の知識が影響を及ぼしていないことを示している。言い換えれば、L1 である中国語の書字的表象から意味的表象を活性化するプロセスが中心であり、L2 である日本語の意味的表象の活性化は弱いということが考えられる。

そこで、次の実験 2 では、L2 である日本語の語彙性判断課題の遂行において、L1 である中国語の意味的表象の活性化がどう影響するかを検討する。

3.2. 実験 2(日本語実験)

3.2.1. 方法

実験 2 では、中国人日本語学習者が L2 である日本語を処理する過程で、中国語の知識がどのように影響するか、また日本語習熟度はどのように影響するかを検討する。そのために、日本語の語彙性判断課題によるプライミング実験を行う。刺激語は O 語タイプ 2(共有義と日本語独自義のある O 語)である。実験の方法は実験 1 と同じである。

3.2.2. 被験者

実験1と同じである。

3.2.3. 刺激語

語彙性判断課題の対象となるターゲット語は共有義と日本語独自義の両方を含むO語タイプ2である。実験1と同様の方法で、以下の21語を選んだ。なお、これらのO語タイプ2の共有義と日本語独自義はAppendix4に示した通りである。

「白紙」「裁断」「衝撃」「処分」「反対」「訪問」「貴重」
 「監督」「流出」「夢中」「演習」「心中」「調子」「日中」
 「素材」「公式」「注意」「審判」「収容」「高度」「無理」

次に、プライム語を選んだ。O語タイプ2には、共有義と日本語独自義の両方があるので、プライム語も共有義と関係があるプライム語、すなわち共有義プライム語と、日本語独自義と関係があるプライム語、すなわち日本語独自義プライム語を、1つずつを選んだ。

選定にあたっては、実験1と同様に、共有義プライム語と日本語独自義プライム語の間で、意味要因以外の特性に違いが無いように統制した。統制した語彙特性は、実験1と同様の6つの特性に(ただし、実験2は日本語実験であるため、意味的関連性については、日本語母語話者30名を対象に行った質問紙の予備調査に基づく値である)、書字の異形度も加え、全部で7つの特性である。書字の異形度とは、日本語の字体と中国語の簡体字との形態的相違の程度を示す。本研究の異形度の判定は、茅本(1996)の指標を参考にし、日中間で完全に同形の場合(例えば、「白」と『白』)は0、偏旁のいずれかの一部が異なる場合(例えば、「訪」と『访』、「療」と『疗』)は1、漢字全体が全く異なる場合や簡体字における省略が著しい場合(例えば、「無」と『无』、「習」と『习』)は2と、0から2までの3段階の評定値とした。

以上の7つの語彙特性が、共有義プライム語と日本語独自義プライム語の間で均質になるように、1語ずつ選んだ(プライム語の一覧はAppendix5を参照)。共有義プライム語と日本語独自義プライム語のこれら7つの語彙

特性の平均と標準偏差は、表7に示した通りである。独立したサンプルの t 検定の結果、これらの7つの語彙特性のすべてに関して、共有義プライム語(21語)と日本語独自義プライム語(21語)との間に有意な違いはなかった。

表7 共有義プライム語と日本語独自義プライム語の語彙特性比較

語彙特性	共有義プライム語		日本語独自義 プライム語		t 検定の結果
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
(1) 意味的関連性	3.66	0.42	3.92	0.53	$t(40)=0.260, n.s.$
(2) 語彙使用頻度(日本語)	20,931	48,019	26,757	29,205	$t(40)=-475, n.s.$
(3) 語彙使用頻度(中国語)	0.00	0.02	0.01	0.01	$t(40)=-0.088, n.s.$
(4) 親近性(日本語)	5.91	0.40	6.06	0.36	$t(40)=-1.294, n.s.$
(5) 漢字画数(日本字体)	19.43	4.38	19.95	5.75	$t(40)=-0.332, n.s.$
(6) 難易度(日能験出題級)	1.57	1.21	1.86	0.85	$t(40)=-0.886, n.s.$
(7) 書字異形度	0.57	0.60	0.76	0.77	$t(40)=-1.313, n.s.$

以上のようにして、ターゲット語として21語、プライム語として42語(共有義プライム語21語、日本語独自義プライム語21語)を選んだ。基準となる統制条件のプライム刺激は、実験1と同様、“++”とした。従って、共有義プライム語とターゲット語のペアが21対、日本語独自義プライム語とターゲット語のペアが21対、“++”刺激とターゲット語のペアが21対の、合計63対となる。これらの3種類の刺激対から、ターゲット語に使用した単語が重ならないようにして7対ずつの合計21対を3種類作成し、カウンターバランスを取って、被験者に割り当てた。この21対は正しい肯定反応である。

また、分析に使用しないダミー刺激として、正しい否定反応の刺激を21対作成した。ダミー刺激対には、S語のプライム語21語と非単語のターゲット語21語のペアである。非単語は、完全な無意味語11語と、中国語には存在するが日本語には存在しない語10語の計21語とした。なお、正しい否定反応は研究対象とはしないため、1種類のみ作成し、全被験者に共通とした。したがって、被験者一人当たり、正しい肯定反应用の21対と正しい否定反应用の21対からなる合計42対を試行することとなる。このようにして作成した正しい肯定反应用の21対と正しい否定反应用の21対からな

る合計 42 対を作成した。

3.2.4. 手続き

実験の手続きは実験 1 と同じである。なお、本研究では、L1 と L2 の相互の活性化を検討することを目的としているので、L1 実験と L2 実験で同じ SOA を設定した。また、被験者と同じ母集団に属する中国人留学生に対して予備実験を行ったところ、L1 と同じ呈示時間で日本語の語彙性判断課題が正確に行えることが確認された。

3.2.5. 結果

反応時間については、正しく判断された刺激項目のみを分析に使用した。全被験者(64 名)の条件ごとの反応時間と誤答率の平均、標準偏差、およびプライム効果(統制条件から共有義条件を引いた値、または、統制条件から日本語独自義条件を引いた値)は表 8 に示した通りである。

表 8 日本語実験の語彙性判断課題におけるプライム効果

プライム条件	反応時間 (ms)		プライム 効果 (ms)	誤答率 (%)		プライム 効果 (%)
	平均	標準偏差		平均	標準偏差	
共有義条件	1,005	290	△ 75	10.49	10.87	△ 4.47
日本語独自義条件	1,019	272	△ 63	9.82	12.69	△ 5.14
統制条件	1,082	303		14.96	15.36	

注. $n=64$.

反応時間について、意義要因(共有義条件、日本語独自義条件、および統制条件の 3 種類のプライム条件)の反復測定による一元配置の分散分析を行った。その結果、意義要因の主効果が被験者分析で有意であった [$F_1(2, 126) = 3.263, p < .05; F_2(2, 124) = 1.156, n. s.$]。そこで、3 種類のプライム条件について、条件間の単純対比を行った。その結果、共有義条件と統制条件の反応時間について、被験者分析で有意な違いが見られた [$F_1(1, 63) = 4.846, p < .05; F_2(1, 62) = 1.850, n. s.$]。一方、日本語独自義条件と統制条件の反応時間の違いは有意ではなかった [$F_1(1, 63) = 3.687, n. s.; F_2(1, 62) = 1.259, n. s.$]。また、共有義条件と日本語独自義条件の反応時間にも有意な違いはなかった [$F_1(1, 63) = 0.257, n. s.; F_2(1, 62) = 0.302, n. s.$]。

誤答率についても、同様に分析を行った。その結果、意義要因の主効果が被験者分析で有意であった [$F_1(2, 126) = 3.480, p < .05; F_2(2, 124) = 1.462, n. s.$]。そこで、プライム条件について条件間の単純対比を行ったところ、共有義条件も [$F_1(1, 63) = 4.487, p < .05; F_2(1, 62) = 1.670, n. s.$]、日本語独自義条件も [$F_1(1, 63) = 5.739, p < .05; F_2(1, 62) = 2.312, n. s.$]、ともに、統制条件との差が被験者分析で有意であった。ただし、共有義条件と日本語独自義条件には、有意な違いはなかった [$F_1(1, 63) = 0.102, n. s.; F_2(1, 62) = 0.018, n. s.$]。

次に、日本語習熟度の影響を検討するために、実験1と同様に、日本語習熟度による分析を行った。条件ごとの反応時間と誤答率の平均、標準偏差およびプライム効果は表9に示した通りである。分析は、意義要因(共有義条件、日本語独自義条件、および統制条件)と日本語習熟度要因(上位群、下位群)の 3×2 の二元配置の分散分析である。なお、意義要因は反復測定の内要因で、日本語習熟度要因は被験者間要因である。

反応時間について分析した結果、意義要因も [$F_1(2, 84) = 3.185, p < .05; F_2(2, 80) = 4.510, p < .05$]、日本語習熟度要因も [$F_1(1, 42) = 6.589, p < .05; F_2(1, 40) = 11.747, p < .001$]、主効果が有意であった。しかし、両変数の交互作用は有意ではなかった [$F_1(2, 84) = 0.182, n. s.; F_2(2, 80) = 0.776, n. s.$]。反復測定である意義要因の主効果が有意であったので、その3種類のプライム条件について条件間の単純対比を行った。その結果、共有義条件と統制条件の反応時間に有意な違いが見られた [$F_1(1, 42) = 5.093, p < .05; F_2(1, 40) = 7.875, p < .01$]。しかし、日本語独自義条件と統制条件の反応時間については有意な違いはなかった [$F_1(1, 42) = 1.828, n. s.; F_2(1, 40) = 1.931, n. s.$]。

さらに、実験1と同様に、日本語習熟度の影響を考察するために、上位群と下位群のそれぞれにおいて、意義要因の反復測定による分散分析を行った。その結果、上位群では、意義要因の主効果が有意であった [$F_1(2, 42) = 3.959, p < .05; F_2(2, 40) = 5.355, p < .001$]。そこで、3種類のプライム条件について条件間の単純対比を行ったところ、共有義条件と統制条件の反応時間には有意な違いが見られた [$F_1(1, 21) = 5.889, p < .05; F_2(1, 20) = 8.339, p < .001$]。しかし、日本語独自義条件と統制条件の反応時間については有意な違いはなかった [$F_1(1, 21) = 2.552, n. s.; F_2(1, 20) = 3.286, n. s.$]。また、

共有義条件と日本語独自義条件の反応時間にも有意な違いはなかった [$F_1(1, 21) = 2.191, n. s.$; $F_2(1, 20) = 0.047, n. s.$]。一方、下位群については、意義要因の主効果が有意ではなかった [$F_1(2, 42) = 0.667, n. s.$; $F_2(2, 40) = 1.382, n. s.$]。以上の結果から、上位群では、中国語の知識が日本語の処理過程で促進的な影響を及ぼすが、下位群では、中国語の知識が日本語の処理に影響を及ぼさないことが示された。

次に、誤答率についても同様の分析を行ったところ、意義要因の主効果は有意ではなかった [$F_1(2, 84) = 2.406, n. s.$; $F_2(2, 80) = 2.022, n. s.$]。しかし、日本語習熟度要因の主効果は有意であった [$F_1(1, 42) = 6.012, p < .05$; $F_2(1, 40) = 4.055, p < .05$]。すなわち、表9の誤答率の平均からも明らかなように、日本語習熟度の上位群はすべてのプライム条件で下位群よりも誤答率が低いことが示された。なお、両変数の交互作用は有意ではなかった [$F_1(2, 84) = 1.243, n. s.$; $F_2(2, 80) = 1.304, n. s.$]。

表9 日本語実験の語彙性判断における反応時間、誤答率およびプライム効果

日本語上位群						
プライム条件	反応時間 (ms)		プライム効果 (ms)	誤答率 (%)		プライム効果 (%)
	平均	標準偏差		平均	標準偏差	
共有義条件	880	169	△ 127	9.74	9.23	△ 0.65
日本語独自義条件	933	163	△ 74	7.14	10.57	△ 3.25
統制条件	1,007	259		10.39	10.04	

注. $n = 22$

日本語下位群						
プライム条件	反応時間 (ms)		プライム効果 (ms)	誤答率 (%)		プライム効果 (%)
	平均	標準偏差		平均	標準偏差	
共有義条件	1,074	318	△ 78	12.34	12.70	△ 8.44
日本語独自義条件	1,108	336	△ 43	14.29	15.90	△ 6.49
統制条件	1,152	324		20.78	18.03	

注. $n = 22$

3.2.6. 考察

以上の結果から、中国人日本語学習者のO語タイプ2の日本語処理については、日本語習熟度によってプライム効果が異なることがわかった。まず、日本語習熟度の上位群では、共有義に関連したプライム語を先行呈示した場合は、同形語の日本語としての語彙性判断課題の遂行において、プライ

ム効果が認められた。このことは、日本語習熟度の上位群の場合、同形語を日本語として処理する過程で、L1の中国語の知識が促進的な影響を及ぼしていることを示す。ただし、日本語独自義に関連したプライム語を呈示した場合にも、プライム効果が認められると予想していたが、実験の結果、プライム効果は認められなかった。この点については、次節で議論する。一方、日本語習熟度の下位群の場合、共有義に関連したプライム語を呈示した場合も、日本語独自義に関連したプライム語を呈示した場合も、日本語としての同形語の語彙性判断課題にプライム効果は認められなかった。このことは、下位群の日本語処理においては、L1の中国語の知識が影響していないことを示している。下位群であっても、共有義に関連したプライム語を呈示した場合には、プライム効果が認められると予想していたが、実験の結果、プライム効果は認められなかった。この点についても、次節で議論する。以上の実験2の結果を総合すると、L2である日本語の処理において、L1である中国語の知識が促進的な影響を及ぼすか否かは、日本語習熟度に依存し、日本語習熟度が高い学習者は、日本語の語彙処理に中国語の知識を有効に活用していることが示唆された。

4. 総合的考察

本研究は、中国人日本語学習者が日本語と中国語の間で意味に微妙なズレのある同形類義語を、L1の中国語とL2の日本語でどのように認知処理しているかを検討した。

実験1では、中国語を処理する過程で、日本語の知識がどのように影響するかを分析した。その結果、日本語習熟度の低い中国人日本語学習者だけでなく、日本語習熟度の高い学習者も、共有義条件と中国語独自義条件で、同程度のプライム効果が認められた。このことから、中国語を処理する過程では、日本語の知識による影響はほとんど無いことがわかる。この理由としては、中国語の書字的表象から意味的表象の活性化の流れが強固であるため、日本語の知識の助けがなくても、語彙性判断が容易に行えるからだと考えられる。

実験2では、日本語を処理する過程で、中国語の知識がどのように影響するかを分析した。その結果、日本語習熟度の違いによって、中国語の知識

が日本語の処理に及ぼす影響が異なることがわかった。まず、日本語習熟度の高い学習者の場合、共有義条件でのみプライム効果が認められた。これは、日本語の処理において中国語の知識が促進的な影響を及ぼしたからだと考えられる。しかし、日本語独自義条件でプライム効果が認められなかったのは、上位群であっても、プライム効果が観察されるほどには、日本語の書字的表象から日本語独自義の意味的表象を活性化させるプロセスが強固でないためだと考えられる。一方、日本語習熟度の低い中国人日本語学習者の場合、共有義条件でも日本語独自義条件でもプライム効果が見られなかった。共有義は中国語でも用いられる意味であるが、日本語の学習が進んでいない段階では、日本語の書字的表象と共有義との結びつきも弱いため、意味的表象が迅速に活性化しないからだと考えられる。

以上の結果は、L1の処理過程ではL2の知識が影響しないという点、またL2の処理においてはL1の知識が促進的な影響を及ぼすという点で、玉岡・宮岡・松下(2002)の研究の結果と一致した。ただし、本研究では、L2の処理にL1の知識が促進的な影響を及ぼしたのは上位群のみであり、下位群では認められていない。玉岡・宮岡・松下(2002)では、L2の処理にL1が促進的な影響を及ぼすことが示唆されたが、玉岡・宮岡・松下(2002)の被験者が超絶レベルの学習者であったことから考えると、L2の処理にL1の知識が促進的な影響を及ぼすには、相応のL2の言語習熟度が必要であるということが推測される。すなわち、L2の言語習熟度が十分に高くなければ、L1の知識を効率的に活用できないということである。

では、どうしてL2の言語習熟度が高くなければ、L1の知識が有効に活用できないのであろうか。これは、O語の習得の仕方に関わるものであると考えられる。同形同義語のように中国語の知識をそのまま転用できる同形語とは異なり、O語には共有義と独自義の複数の意味があるため、日本語の意味範囲と中国語の意味範囲を比較しなければ、どの意味が日本語と中国語で共通なのかを正しく把握することができない。したがって、中国人日本語学習者は日本語学習の初期段階から、日本語の同形語1つ1つについて、どのような意味が備わっているのか、どこからどこまで中国語の知識を転用できるのか、中国語にはない日本語独自の意味は何か、中国語のどの意味を当てはめると日本語では誤用になるのか、といった意味的な差異を分析的に理解し、それを習得しなければならないのである。こうした分析的習得を段

階的に経ることによって、日本語の書字的表象と意味的表象との連合関係が徐々に強固になり、意味の活性化が迅速になっていくと考えられる。

本研究の結果は、日本語習得研究の知見(加藤 2005, 陳 2003)とは異なっている。L2 としての日本語の習得研究では、日本語習熟度の低い中国人日本語学習者でも、S 語や O 語の共有義は正答率が高く、中国語からの正の転移が奏功すると報告されている。この知見に基づけば、本研究の下位群にも共有義にプライム効果が認められると予想されるであろう。しかし、実際には下位群には共有義のプライム効果は認められなかった。これは、先行研究と本研究の研究手法の違いが影響していると考えられる。加藤(2005)の場合は文の正誤判断テスト、陳(2003)の場合は四者択一の選択肢テストを使用している。こうしたテストはオフラインであるため、十分な時間を使って、様々な知識とストラテジーを駆使して、問題となっている単語について判断することができる。したがって、加藤(2005)や陳(2003)の結果は、日本語習熟度の低い中国人学習者でも、一定の時間を与えられれば、前後の文脈を十分に検討して、中国語の知識を転用することができるということを示していると言えよう。しかしながら、本研究のように単体で呈示された単語に対して迅速な判断が要求されるオンラインの条件では、日本語習熟度の低い学習者は、たとえ共有義であっても L1 の中国語の知識の転用が迅速に行われないため、反応時間が迅速にならなかったと考えられる。

5. 今後の課題

本研究は、以下のような点で、今後課題を残している。まず、共有義や独自義といった語義は、それぞれの同形語によって、どちらの意味の方が良く用いられており、親近性が高いかが異なる。そのため、意味の活性化は、語の使用頻度ではなく、その語がどちらの意味で使用されることが多いのか、すなわち、意味の使用頻度や親近性に起因する可能性がある。例えば、日本語の「公式」の場合、中国語との共有義〈数学の式〉と、日本語独自義の〈公の〉では、どちらの意味の方が想起されやすいのか、また、どちらの意味で用いられることが多いのか、という問題である。共有義は日本語と中国語の両言語で共通ではあるが、必ずしも独自義よりよく使われる意味であるとは限らない。ターゲット語が使用されるのが、日本語独自義を指示する

場合の方がよく使われるのであれば、日本語独自義の方が共有義より活性化しやすいだろう。また、共有義の方が活性化が迅速だとしても、それは、共有義の方がよく使われる意味だからかもしれない。本研究では、ターゲット語の使用頻度や親近性については、近藤・天野(1999, 2000)の指標によって統制したが、意味の使用頻度については、現在のところ、一般に参照される指標がない。よって、共有義と独自義の意味の活性化の相違をより厳密に検討するためには、コーパスのデータから当該同形語のそれぞれの意味の使用頻度を検討する、語義の活性化の反応時間を事前に測定する等の工夫をして、実験を行う必要があると考える。

また、本研究の結果から、L2の処理過程にL1の知識が促進的な影響を及ぼすようになるには、ある一定以上のL2習熟度が必要であることを示した。しかし、はたしてどの程度のL2習熟度であれば、L1の知識が迅速なL2の単語の処理に促進的な影響を与えることができるのであろうか。本研究では、日本語習熟度の上位群と下位群をクローズテストによって相対的に弁別したが、上位群と下位群の能力がどの程度であったかを記述的に示すことができなかった。したがって、今後は、L2の単語の処理過程にL1の知識が有効に作用するには、どのようなL2の日本語能力がどの程度必要なのかを明らかにしなくてはならない。

今後、これらの残された課題に取り組みながら、中国人日本語学習者が同形語をどのように処理しているのか、考察を続けていきたい。

〔謝辞〕本稿の内容は、小森和子が2007年3月に東京大学から学位授与された博士學位論文の中の実験の一部について、追加分析を行い、まとめたものである。博士論文の主査である東京大学大学院の近藤安月子先生に心から感謝の意を表したい。また、本稿の査読者から、大変貴重なコメントをいただいた。ここに記して、感謝申し上げる。

注

- 1 本稿では、中国語は簡体字で表記するが、日本語との混同を避けるために、中国語には『 』を付し、日本語には「 」を付す。また、単語の意味や指示には、〈 〉を付して示す。

- 2 小森・玉岡・近藤(2008)では、本稿で言う“O語タイプ1”を“O語(2)”と呼んでいるが、両者は同じものを指している。

参考文献

- 北京语言学院语言教学研究所(編)(1985)『現代汉语頻率詞典』北京语言学院出版社。
- 文化庁(1978)『中国語と対応する漢語』文化庁。
- 文化庁(1983)『漢字音読語の日中対応』文化庁。
- Chen, Hsin-Chin, Takashi Yamauchi, Katsuo Tamaoka, and Jyotsna Vaid(2007) Homophonic and semantic priming of Japanese kanji words: A time course study. *Psychonomic Bulletin & Review* 14(1), 64–69.
- 陳毓敏(2002)「日本語二字漢字語彙とそれに対応する中国語二字漢字語彙は同じか—台湾及び中国の中国語との比較—」, 『言語文化と日本語教育』24, 40–53.
- 陳毓敏(2003)「中国語を母語とする日本語学習者の漢語習得について—同義語・類義語・異義語・脱落語の4タイプからの検討」, 『平成15年度 日本語教育学会秋季大会予稿集』174–179.
- 中国社会科学院语言研究所词典编辑室(編)(1996)『現代汉语詞典』商务印书馆。
- Douglas, Masako(1994) Japanese cloze tests: Toward their construction. *Japanese-language Education around the Globe [Sekaino Nibongo Kyoouiku]*4, 117–131.
- Forster, Kenneth, Christopher Davis, Colin Schoknecht, and Rob Carter(1987) Masked priming with graphemically related forms: Repetition or partial activation? *Quarterly Journal of Experimental Psychology* 39A, 211–251.
- Forster, Kenneth and Marcus Taft(1994) Bodies, antibodies, and neighborhood-density effect in masked form priming. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition* 20, 844–863.
- 菱沼透(1980)「中国語と日本語の言語干渉—中国人学習者の誤用例—」, 『日本語教育』42, 58–72.
- 秦喜美恵(1983)「クローズ法による日本語能力の測定」, 『国際基督教大学学報 教育研究』25, 141–177.
- 秦喜美恵(1987)「日本語能力評価のための—考察—クローズ・テストの信頼性, 妥当性, および採点法の問題」, 『言語文化論集』8(2), 229–246.
- 飛田良文・呂玉新(1994)『日本語・中国語意味対照辞典』南雲堂。
- 池田重(監修)(1990)『中級からの日本語 読解中心』新典社。
- Jonz, Jon(1990) Another turn in the conversation: What does cloze measure? *TESOL Quarterly* 24(1), 61–83.
- 加藤稔人(2005)「中国語母語話者による日本語の漢語習得—他言語話者との習得過程の違

- いー], 『日本語教育』 125, 96-105.
- 茅本百合子(1996)「日本語漢字と中国語漢字の形態的・音韻的差異が中国語母語話者による日本語漢字の読みに及ぼす影響」, 『広島大学教育学部紀要 第二部』 45, 345-352.
- 金若静(1987)『同じ漢字でも—これだけ違う日本語と中国語』 学生社.
- 金若静(1990)『続・同じ漢字でも—これだけ違う日本語と中国語』 学生社.
- Koda, Keiko(1989)The effects of transferred vocabulary knowledge on the development of L2 reading proficiency. *Foreign Language Annals* 22, 529-542.
- 国際交流基金・日本国際教育支援協会(編著)(2002)『日本語能力試験出題基準(改訂版)』 凡人社.
- 小森和子(2010)『中国語を第一言語とする日本語学習者の同形語の認知処理』 風間書房.
- 小森和子・玉岡賀津雄・近藤安月子(2008)「中国語を第一言語とする日本語学習者の同形語の認知処理—同形類義語と同形異義語を対象に一」, 『日本語科学』 23, 81-94.
- 近藤公久・天野成昭(編)(1999)『NTT データベースシリーズ 日本語の語彙特性 第1巻 単語親密度』 三省堂.
- 近藤公久・天野成昭(編)(2000)『NTT データベースシリーズ 日本語の語彙特性 第7巻 頻度』 三省堂.
- 増田光吉(1964)『アメリカの家族・日本の家族』 日本放送出版協会.
- 守屋宏則(1979)「資料・日中同形語—その意味用法の差違—」, 『日本語学校論集』 6, 159-168.
- Nation, Paul(2001)*Learning Vocabulary in Another Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 小川多恵子(1992)「プレースメントテストとしてのクロズテスト」, 『日本語教育論集』 8, 201-214.
- Oller, John(1971)Dictation as a device for testing foreign language proficiency. *English Language Testing*, 25, 254-259.
- Oller, John(1973)Cloze tests of Second Language Proficiency and What they measure. *Language Learning* 23(1), 105-118.
- Oller, John and Naoko Nagato(1974)The long-term effect of FLES: An experiment. *Modern Language Journal* 58, 15-19.
- 大河内康憲(1992)「日本語と中国語の同形語」, 大河内康憲(編)『日本語と中国語の対照研究論文集(下)』 179-215, くろしお出版.
- Perfetti, Charles and Sulan Zhang(1995)Very early phonological activation in Chinese reading. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, & Cognition* 21, 24-33.
- Posner, Michael and Charles Snyder(1975)Attention and cognitive control. In Robert Solso (Ed.), *Information Processing and Cognition: The Loyola symposium*, 55-85, N. J.: Lawrence

Erlbaum Associates.

Read, John (2000) *Assessing Vocabulary*. Cambridge: Cambridge University Press.

林玉恵(2002)「日華・日漢辞典からみた日中同形語記述の問題点—同形類義語を中心に—」, 『世界の日本語教育』12, 107-121.

玉岡賀津雄・宮岡弥生・松下達彦(2002)「日本語学習者の心的辞書(mental lexicon)の構造—中国語を母語とする超上級日本語学習者の漢字熟語の処理を例に」, 『日本語教育学会中国地区研究集会予稿集』1-8.

Taylor, Insup, and Martin Taylor(1990) *Psycholinguistics: Learning and Using Language*. N. J.: Prentice-Hall.

鶴見千鶴子(2005)『日本語学習者の文章理解に及ぼす音声化の影響—つぶやき読みの効果—』風間書房.

内田万里子(1992)「日本語と中国語—中国人学習者への日本語教育のために—」, 『日本語・日本文化研究』1, 42-52.

上野恵司・魯曉琨(1995)『おぼえておきたい日中同形異義語 300』光生館.

Yamashita, Sayoko(1994) Is the reading comprehension performance of learners of Japanese as a second language the same as that of Japanese children?: An analysis using a cloze test. *Japanese-language Education around the Globe [Sekaino Nihongo Kyooiku]*4, 133-146.

—————(小森)九州大学

—————(玉岡)名古屋大学

Abstract

The Cognitive Processing of Lexical Homographs by Native Chinese Speakers Learning Japanese

Kazuko Komori and Katsuo Tamaoka

The present study investigates how native Chinese speakers learning Japanese (hereafter, “NCSs”) process homographs or orthographically identical lexical items in both the Japanese and Chinese languages. Two types of homographs are used as target words in the present study. The first type is semantically overlapping homographs which share the same meaning in both languages, but contain additional meanings only in Chinese (“O-type 1”). For example, 貧乏 / 贫乏 means “to be poor” in both Japanese and Chinese, but the Chinese word has the additional meaning “to lack”. The second type consists of those

homographs which share the same meaning in the two languages, but contain additional meanings only in Japanese (“O-type 2”). For example, 反対 / 反对 means “disagree” in both languages, but the Japanese word also means “opposite”. Two experiments are conducted using a lexical decision task in Chinese (Experiment 1) and in Japanese (Experiment 2). The results show the following: (i) in the processing of O-type 1 in Chinese, both the shared meanings and the original Chinese meanings are promptly activated to the same degree regardless of the level of Japanese proficiency; (ii) for advanced NCSs’ processing O-type 2 in Japanese, the shared meanings are immediately activated, but not the original Japanese meanings; and (iii) for lower proficiency NCSs’ processing O-type 2 in Japanese, neither the shared meanings nor the original Japanese meanings are activated. These findings suggest that the learners’ knowledge of Chinese facilitates the processing of Japanese lexical homographs when the NCSs are at an advanced level of Japanese proficiency.

Appendix 1

次の文を読んで、()に、漢字、ひらがな、カタカナのいずれか 1文字 を書き入れて、文の意味が通るように、文を完成してください。

例：むかしむか(し)、あるところ(に)、おじいさん(と)おばあさんが、(住)んでいまし(た)。おじいさん(は)山へ木を切(り)に、おばあさんは(川)へ洗濯に、(出)かけていき(ま)した。

アメリカの()も、日本の親()同じように、()順な子を高()評価すると()う点で、かわ()が無い。親の()いつけを素()に聞き、親に()抗しない子が、()い子とされる()はアメリカも()様である。()かし、“従順”()という言葉は()もかく、その()容となると、()少問題があ()。

アメリカの()合、“従順”とは、()と子の間に()り決めたル()ルを忠実に()るというこ()である。これ()のルールは、()もすれば、親()側から一方()に押し付け()れがちであ()が、それでも()服するような顔を()ず、忠実に従()ていくこと()ある。

日本で(), この点で少()違う。前にも()べたように, ()と子の間で, ()らかじめ何()を取り決め()おくという()え方がない。悪く()えば, 出たと()勝負のやり()で親と子の()きあいが行()れている。こ()のような, 行き()たりばった()のやり方で, ()が安心して()られるのは, ()局, 親の側に, 「()がこれだけ()わいがった()供が, 私にそ()くはずがない。」()いう信念が()るからだ。母()子の相互依()関係が深く, ()夜, 子供のコ()に気を配っ()いる母親の()合, 特にこの()向が強い。子()を思うあま(), 自分と子供()を区別して()える余裕がな()なってしまう(), 「自分の子供()から自分と()じように考()ている。」などと()覚してしま()母親も出て()る。「うちの子に()ってそんな()とをする()ずはない。」とい(), 日本でよく()かれる言葉は, ()のあたりの()情をよく物()っている。

Appendix 2

ターゲット	共有義	中国語独自義
曖昧	はっきりしないこと	いかがわしいこと, 不正なこと
意見	考え	不満, 異存
緊張	張り詰めて緩みがないこと	不足している, 忙しい
検査	適不適や異常の有無等を調べること	自己批判する, 反省する
严重	厳しいこと	深刻である, 重大である
广大	広くて大きいこと	広範な, 多くの
困难	苦しみ悩むこと	生活, 経済的に困窮している
失敗	やってみたが, うまくいかないこと	負けること, 敗北すること
释放	拘束されている者を自由にすること	物質, エネルギー等を放出すること
所有	自分のものとして持っていること	すべての, あらゆる
处理	物事をさばいて, 始末すること	物を安く売り払うこと, 特売すること
生气	生き生きとした気力, 活力	腹が立つ, 怒る
大意	大体の意義	うかつである, 不注意である
多少	少しであること	いくら, どのぐらい
对象	目標となるもの	結婚や恋愛の相手, 恋人
出口	外へ出る口	輸出する
东西	東と西	事物, 人
热心	1つの物事に深く打ち込む	心が温かい, 親切であること
培养	草木, 微生物等を発育, 増殖させること	人を養成する, 育成する
品质	品物の性質	性格, 人間の本質
输入	外国から財貨を買い入れること	データを入力する, 打ち込む

Appendix 3

ターゲット語	共有義 プライム語	中国語独自義 プライム語
暧昧	明确	异性
意见	交换	不满
紧张	缓和	资金
检查	安全	反省
严重	处罚	问题
广大	面积	人民
困难	克服	生活
失败	成功	败北
释放	人质	激情
所有	财产	全部
处理	事务	特价
生气	旺盛	激怒
大意	主旨	过失
对象	调查	恋人
多少	若干	人数
出口	入口	贸易
东西	方位	物品
热心	教育	友人
培养	细菌	学生
品质	管理	人格
输入	海外	文字

Appendix 4

ターゲット	共有義	日本語独自義
白紙	白色の紙	原状, 元の状態
裁断	是非, 善悪を判断すること	布, 紙等を型に合わせて切ること
衝撃	突き当たって, 激しく打つこと	心に激しく打つようなショック
処分	規則に則り, 処罰すること	余ったものを処理, 廃棄すること
反対	ある意見などに対して逆らうこと	対立・逆の関係にあること
訪問	公式に人を訪ねること	個人の家を訪ねること
貴重	物品等が極めて高価で大切なこと	時間, 経験等が極めて大切, 珍しいこと
監督	指図したり, 取り締まること	指図, 取り締まる人, 機関
流出	液体が外に流れて出ること	人, 金銭等が外部に漏れること
夢中	夢を見ている間	物事に熱中して我を忘れること
演習	軍隊等が実践を想定して行う訓練	教師の指導のもとに研究活動を行う授業
心中	心のうち, 胸中	二人以上の者が共に死に遂げること
調子	音の高低, 音調	体や物事の動きの具合
日中	日本と中国	日のある間, 昼間
素材	芸術創作の材料となるもの	もととなる材料, 原料
公式	数や式の間になり立つ関係	公に定めた方式, 儀式
注意	気を配ること, 留意	相手に対して警告すること
審判	事件を審理して判断, 判決すること	競技中に勝敗やプレーの適否を判定する人
収容	被災者等を一定の場所に保護すること	人や物品を一定の場所におさめ入れること
高度	高さ, 変化の程度が強いこと	内容の質的レベルが高いこと
無理	道理が無い, 正当な理由が無い	するのが困難である, できないこと

Appendix 5

ターゲット語	共有義 プライム語	日本語独自義 プライム語
白紙	鉛筆	撤回
裁断	公平	衣服
衝撃	破壊	事実
処分	退学	廃棄
反対	戦争	方向
訪問	首相	医療
貴重	高価	時間
監督	指揮	選手
流出	液体	情報
夢中	空想	読書
演習	軍事	指導
心中	感情	自殺
調子	音楽	健康
日中	外交	白昼
素材	小説	新鮮
公式	代数	発表
注意	細心	警告
審判	裁判	大会
収容	難民	劇場
高度	発展	表現
無理	道理	簡単

レキシコンフォーラム No.5

発行 2010年6月24日 初版1刷

定価 4800円＋税

編者 © 影山太郎

発行者 松本 功

装丁者 平井正義

印刷所・製本所 三美印刷株式会社

発行所 株式会社ひつじ書房

〒112-0011 東京都文京区千石 2-1-2

大和ビル 2F

Tel. 03-5319-4916 Fax. 03-5319-4917

郵便振替 00120-8-142852

toiawase@hituzi.co.jp

<http://www.hituzi.co.jp>

造本には充分注意しておりますが、落丁・乱丁などがございましたら、

小社かお買上げ書店にておとりかえいたします。

ご意見、ご感想など、小社までお寄せ下されば幸いです。

ISBN978-4-89476-518-4 C3080

〈刊行のご案内〉

レキシコンフォーラム 影山太郎 編

- No.1** 特集 = 言語学と辞書 4,000 円 + 税
No.2 特集 = 辞書と言語情報処理 4,000 円 + 税
No.3 特集 = 日本語のレキシコンと音韻構造 4,800 円 + 税
No.4 特集 = 複合動詞と複雑述語 4,800 円 + 税
No.5 特集 = 移動と変化と経路 4,800 円 + 税

ひつじ研究叢書 (言語編)

【第 56 卷】 日本語の主文現象—統語構造とモダリティ

長谷川信子 編 7,600 円 + 税

【第 62 卷】 結果構文研究の新視点

小野尚之 編 6,200 円 + 税

【第 80 卷】 結果構文のタイポロジー

小野尚之 編 9,400 円 + 税

影山太郎 (編)

Edited by Taro Kageyama

レキシコンフォーラム

Lexicon Forum

No.5

『レキシコンフォーラム』編集委員会

編集主幹：影山太郎(国立国語研究所)

編集委員：

【言語学・英語学】伊藤たかね(東京大学)，杉岡洋子(慶應義塾大学)，由本陽子(大阪大学)，小野尚之(東北大学)，岸本秀樹(神戸大学)，松本 曜(神戸大学)，長谷川信子(神田外語大学)，窪藺晴夫(国立国語研究所)

【日本語学】斎藤倫明(東北大学)，石井正彦(大阪大学)

【心理言語学】玉岡賀津雄(名古屋大学)【神経言語学】萩原裕子(首都大学東京)

【情報工学】郡司隆男(神戸松蔭女子学院大学)，井佐原 均(豊橋技術科学大学)